『世界の日本語教育』3, 1993年3月

名詞述語文の構造
談話文法の観点より

島 守 玲 子*

キーワード: 名詞述語文, ノダ文, 旧情報, 新情報, 焦点

要 旨

名詞述語文は述語が名詞＋ダの構造を持つ文である. 従来この種の文は主に意味論的な見地から名詞の特性によって分類され, 研究が進められて来た. しかしこの問題を談話レベルから見直すと, 名詞述語文だけでなくノダ文にも統一的な説明を与えることが出来る. 本稿では前提と焦点という二要素を用いて文の分類を試みた. 即ち, 1) 文焦点型, 2) 広域焦点型, 3) 一点焦点型, 4) 二点焦点型, 5) 焦点不在型, の五種類の文型を設定したのである. 1) は前提無しに文全体が新情報を表わす「現象文」と言われる文である. 2) は旧情報に対して説明を与える文, 3) は文中の一要素が焦点となっている文, 4) はいわゆるウナギ文の中, 主題も述部も新情報を表わしていると見られる型, そして 5) は何ら新しい情報を付け加えず, 確認に用いられる文である.

この分類を用いると, 従来構文論的見地から様々な解釈が試みられ, 論議を呼び起こして来たウナギ文にも談話論レベルから統一的な解釈を与えることが可能になる. また, ノダの意味として, 相互の関連も無く単に羅列されて来た説明, 強調, 強調等が談話構造の違いに依る特徴として把握されることになる.

本稿は談話文法の観点から行った名詞述語文の分析の一試論である.

はじめに

名詞述語文とは述語が名詞＋ダ[1]の構造を持つ文のことである. 形態論的には形容詞(述語)文, 動詞(述語)文に対するものであり, 或いは形容詞文と共に状態述語文に組み入れられて動作述語文に対することもある[2]. また, 意味論的には物語文に対する品定め文であり[3], 現象文に対する

* SHIMAMORI Reiko: リヨン第三大学 (University of Lyon III, France) 外国語学部日本語科助教授.

[1] 本稿ではダという片仮名表記は「だ」「です」「である」「であります」などの異形態を含む形態素を表わすものとする. 同様にノダは「のです」「んだ」「んです」等の異形態を含む形態素である.

[2] 三上章(1953)の分類
1. 動詞文, 2. 名詞文: イ—形容詞文, ロ—準詞文
川端善明(1976)の分類
1. 動詞文, 2. 形容詞文(含, 名詞文)

[3] 佐久間鼎(1941)の分類
言いたて文(平叙文) 1. 物語文, 2. 品定め文: イ—性状規定 ロ—判断措定

判断文[4,5]であると言える.

従来名詞述語文の問題は主に名詞句の意味的特性から措定文，指定文という分類が行われて来た．しかし文を談話を構成する一単位として見れば，名詞述語文についてもまた別の分類が出来るのではないだろうか．措定文，指定文という分類を基にしつつ，文の構成要素を旧情報，新情報との関係で捉え直してみると談話の流れが見えて来，その中での主題や述部の役割もより明確につかめるようになる．また，日本語教育で説明が難しいとされるノダ文も統語論的見地から言えば名詞述語文と見なすことが出来る．ノダ文を名詞述語文の枠組の中で捉え，両者に統一的な説明を与えることは出来ないであろうか.

これが本稿の出発点である．以下において 1. では名詞述語文を談話レベルで分類し，この分類を基に 2. ではノダ文の構造を分析して，日本語の名詞述語文の構造に対して総括的な解釈を与えることを試みる.

1. 名詞述語文の談話論的解釈

1-1. 旧情報と新情報

文は基本的に話し手が聞き手に何らかの情報を伝える目的で発せられる．その情報は聞き手にとって全く新しい情報であることもあれば，話し手と聞き手に共通の知識(旧情報)に何らかの新しい情報を付け加えることもある．新情報は話し手がその文を使って聞き手に初めて伝える情報であるので当然重要度は高く，文の要となる．これを文の焦点と呼ぶ．焦点は文中の一要素だけに置かれる場合もあれば，新情報を伝える部分全域(焦点領域)に及ぶこともある．従って文は主語，述語等の統語構造以外に，あるまとまった談話の中の一単位として既知—未知，或いは旧情報—新情報という情報構造をも合わせ持っていると考えられる．そこで，談話レベルでの文の分類が出来るのではないかと，筆者は考えた．本稿では名詞述語文の構造を考えるに当たって大野晋(1978)の分類を基にし，一文中の焦点の現われ方による文の分類を行ってみた．大野の分類は以下の通りである.

(1) 既知(扱い)+未知(扱い)　　例　私は大野です.

(2) 既知(扱い)+既知(扱い)　　例　どうせ日本人は日本人だ.

---

[4] 三尾砂(1948)の分類
1. 現象文，2. 判断文，3. 未展開文，4. 分節文(不完全文)
仁田義雄(1991)の分類
述べ立て文：1. 現象描写文，2. 判定文

[5] 現象文と判断文という名称を用いると現象文には判断が存在しないような印象を受けるが決してそうではなく，性質の違う判断が存すると見なければならない．内田(1989)は現象文の判断を「知覚判断」，判断文のそれを「経験判断」と使い分けている.

(3) 未知(扱い)+既知(扱い)　　例　私が大野です.

(4) 未知(扱い)+未知(扱い)　　例　花が咲いている.

以下に各々の文類型について詳しく見て行くことにしよう.

1-2. 名詞述語文の文類型

1-2-1. 「文焦点型」の名詞述語文

「文焦点型」の文とは前提が無く，文全体が聞き手にとって新情報を表わす型の文である．これは大野の (4) のタイプの文に当たり，新しい事象を話し手の分析を加えずに，いわば丸ごと客観的に言語表現化して述べる文である．この種の文は新情報を伝える部分が文全体に広がっている，言い換えれば文全体が焦点(領域)と見ることが出来るので，「文焦点型」の文と呼ぶことにする．「文焦点型」の文はいわゆる「現象文」に当たり，事象を叙述する動詞文がその中心となる．形容詞文は一時的な状態を表わす場合(空が青いなあ．ああ，桜がきれいだ.)に限って文焦点型と解釈され得る．名詞はある事物に与えられた名称であるから本来時間的変化の概念とは無縁のものである．従って文焦点型と解釈される名詞述語文は数少ない．以下がその例である．

例 1　あら，また雪ですわ．(立原正秋『辻が花』)

例 2　うつくしい空だ．(夏目漱石『三四郎』)

例文 1 は外に舞う雪を発見してそれを分析の余裕なく「雪です」と表出したものである．これは事象の生起を認めた時の感動，驚きを一語に凝縮して表現する，三尾砂(1948)が「未展開文」と名付けた種類の文である．この種の名詞は事物ではなく一つの事象全体(雪が降って来たこと)を指向していると解釈できるので，「事象名詞」と呼ぶ．「事象名詞」は動詞を内包した名詞であると言える．例文 2 は「空が美しい」と形容詞文で表わせるところをやはり感動を籠めて名詞「空」を文の核に据えた表現である．どちらも時間と空間によって限られたある特定の環境の中でのみ正しく理解される，いわば現場との密着性が強い文である．

この「文焦点型」の名詞述語文は次のように有題文が構文的な変形を受けて表層構造としては無題の名詞述語文になったものとは区別されなければならない．

例 3　ラッセルを三台備えて雪を待つ，国境の山だった．(川端康成『雪国』)

例 3′ 国境の山はラッセルを三台備えて雪を待っていた．

例 4　彼女はよく笑う．<u>その笑いの無邪気さよ</u>．(武者小路実篤『友情』)

例 4′ (...)その笑いは無邪気だ．

また，次のような名詞述語文もある．

例 5 翌日だった．朝早く彼は海岸に出て，ある砂丘の上に腰かけて海を見ていた．（武者小路実篤『友情』）

この第一文はそれ自体充足していて主題或いは主語をそもそも必要としない表現である．永野賢(1986)は「このように述語だけで完全な文表現となるものを述語文と名づけ」ている．この種の文は談話レベルでは後の文と一体となって一文を形成すると考えられる．従って元々ひとまとまりの情報単位から話し手がある一つの要素を遊離してダを付加し，統語論上は一つの文に昇格させることによってその要素を卓立させたものと見なし，「文焦点型」の文とは区別することにする．

1-2-2. 「広域焦点型」の名詞述語文

「広域焦点型」の文とは大野の分類の (1) の型 (p. 178) の如く，話し手，聞き手共に知っている対象（旧情報）に対して原則として聞き手の知らない情報（新情報）を付け加えるという文である．いわゆる「判断文」はこの型の文であり，判断の対象の中心（主題 X）とそれに対する判断（述部 Y）という二項から成る典型的な有題文である．ここでは旧情報が文の先頭の位置に現われ，新情報がそれに続くという形をとっている．これは旧から新へという談話の自然な流れに沿っている．この場合の新情報の現われ方は無標(unmarked)であり，福地(1985)はこれを「付加的な新情報」と呼ぶ．この種の文の焦点(の領域)は Y によって表わされる部分全体に及んでいる．

この型の名詞述語文は X ハ Y ダの構文を持つ．以下に二，三「広域焦点型」の名詞文の例を挙げる．

例 6 K は母のない男でした．（夏目漱石『こころ』）

例 7 あの男は信用の出来ない男だ．（武者小路実篤『友情』）

例 8 とにかく恋は罪悪ですよ．よござんすか．そうして神聖なものですよ．（夏目漱石『こころ』）

この三つの例はそれぞれ固有名詞(K)，指示詞(あの男)，総称名詞(恋)によって指示対象をはっきり指定する指示名詞句を主題として持つ文である．「広域焦点型」の文の主題部，即ち旧情報を表わす部分はこのように特定の対象を指示している．この特定の対象については聞き手もある程度の知識を持っているが，聞き手の知らない新しい情報を述部が「母のない男」「信用の出来ない男」「罪悪」「神聖なもの」と加えているのである．従って述部全体が聞き手にとって価値ある情

報を伝えていることになる．ここで述部即ち文の焦点は主題の属性を規定する「属性名詞句」であり，「措定的」(predicational) な意味を持っている．

新情報の中にも重要度の高い要素と低い要素が混じっている．上の例で言えば「男」「もの」等は実質的意味の希薄なあるいはほとんどない名詞であり，情報価値としては連体修飾成文の方が重要度が高いと言える．この場合，統語論的には名詞句の核である名詞は談話上意義のある新情報は伝えていないことになる．

1-2-3. 「一点焦点型」の名詞述語文

談話の自然の流れは時間の流れに沿って旧情報に新情報を線状に付け加えて行くのであることを前節で見た．然しながらこの情報伝達の原則を破る文も実際の発話には多数存在する．即ち新情報が旧情報の前に現われる文である．これは談話の流れに逆らう構造である．旧情報は前の文の内容を受け継ぐことが多くそれによって談話の流れをよくしているのであるが，前の文と直接関係のない新情報が文の先頭に現われると前の文との繋がりがなくなり，そこに断絶が感じられる．そのため新情報により重要な情報価値が与えられ，焦点が強調されることになるのである．この場合は「広域焦点型」の文と違って新情報は文中のただ一つの要素であることが多い．即ち新情報は焦点領域を表わすのではなく，焦点そのものを指している．それ故この種の文を「一点焦点型」の文と名付けたのである．これは大野の (3) の型 (p..179) の文に当たる．「一点焦点型」の文とは次のような文を言う．

例 9　あの上の娘が女房ですよ．(川端康成『伊豆の踊子』)

例 10　その日本人は(. . .)海の方へ歩き出した．<u>その人が即ち先生であった</u>．(夏目漱石『こころ』)

「一点焦点型」の文は「広域焦点型」の文とあらゆる点で対照的である．第一に先に述べたように焦点が前提に先行する．例えば例文 9 では「あの上の娘」が情報の焦点であり，それに続く形で旧情報(「女房」)が現われるのである[6]．「広域焦点型」の文では旧一新の順で情報が流れる．第二に「広域焦点型」の文においては旧情報は特定の個体を指示しているが，「一点焦点型」の文では一つの命題を表わしていると言えるのである．上の例では例文 9 は「話し手に女房があること」を相手も知っていると判断したうえで，それを前提として「それが誰か」という暗黙の問い

[6] この種の文では焦点が文頭，即ち通常主題の位置とされている位置に現われるため「焦点主題化」と呼ぶ人もある (井上，1989 参照) が，この名称は事実を正しく反映していない．なぜならば「一点焦点型」の文の主題は実は焦点の後に来る旧情報の中に隠されているからである (転位陰題)．焦点は新情報を表わすのであるから主題とはなり得ない．

に答える形での発話である．従ってこの文の前提は「(話し手の)女房」という個人を指すのではなく，「話し手の女房は x である」という命題内容を指すことになる．そして焦点はこの命題中の変項 x をこれと具体的に指定するものであるから，指定的 (specificational) な意味を持つ．「広域焦点型」の文では焦点は措定的解釈を受ける．これが両タイプの違いの第三点である．

「一点焦点型」の文と「広域焦点型」の文の情報構造の違いをもう少し見るために次の例文を比べてみよう．

例 11　こちらは小原静子さん．わたしの女学校時代からのお友だち．(立原正秋『辻が花』)
例 12　之が野島君だ．(武者小路実篤『友情』)

どちらも人を紹介する時の発話である．例文 11 は全く予備知識のない聞き手にある人物を紹介する場合に用いられる．聞き手にとって旧情報となり得る情報は目の前にいる人物のみである．そこでそれを主題として次に文の焦点である新情報(名前，職業，話し手との関係，等)を加えて行くという構造を持つ文である．これに対して例文 12 では聞き手が既に「野島」という名前を聞いたことがあり，ある程度の知識は持っているが会ったことはない．このような場合，「野島君という人は x である」という命題を前提として，それはあの人でもその人でもなくこの人だ，と命題を完成させるのがこの種の文である．例文 11 と違って焦点は前提の変項 x を満足し得る値の集合 {a, b, c, . . .} の中から選ばれた一要素と考えられ，選ばれた要素と残りの要素との間に対比がなされる．そこに一種の強調の意味合いが生まれるのである．これを福地(1985)に従って「対照的な新情報」と呼び，「広域焦点型」の文の「付加的な新情報」と区別しよう．「一点焦点型」の文は特殊な文脈を必要とする有標 (marked) の情報構造である．

三上 (1953) は「指定」と呼んだ文類型について，「語順を変えて指定以前のセンテンスに戻すことが出来る」と指摘したが，「一点焦点型」の文はその「指定」の原型と考えられるものである．従ってこの型の文は旧情報を主題の位置に据えてはっきりした有題文の形を取ることもある．

例 13　実際日本で一番有望な小説家はなんと云っても大宮だろう．(武者小路実篤『友情』)

「一点焦点型」の文の前提は一つの命題を表わすので，主題の位置に名詞ではなく機能語ノによって名詞化された節が来ることもある．この種の文は一般に強調構文または分裂文と呼ばれている．

例 14　自分の愛するのは杉子の魂だ，杉子その人だ，その全体だ．. .(武者小路実篤『友情』)

例 15　私が先生と知り合いになったのは鎌倉である．(夏目漱石『こころ』)

この強調構文 X ノハ Y ダは次章で見るノダ文のうちの一点焦点型の文と密接な関係がある．

1-2-4. 「焦点不在型」の名詞述語文

文は普通何らかの新情報を聞き手に伝える目的で発するのであるから，文の有用性という観点から見れば新情報を含まない文は存在価値がないことになり，排除されるはずである．井上(1989)は「『旧，旧』の組み合わせは現実には現れない」と述べている．然しながら，大野の(2)のタイプ(p. 178)にも見られるように，この組み合わせは数少ないながら存在するのである．次のような文がそれである．

例 16　傷ついても僕は僕だ．いつかは更に力強く起き上がるだろう．(武者小路実篤『友情』)
例 17　「佐衛子，こんなことは言い度くないが，女房は女房なのだ．」(大佛次郎『帰郷』)

例文16において主題の「僕」は聞き手も知っている話し手自身を指し，旧情報を表わしている．この旧情報を更に述部で「僕だ」と繰り返している．(但し，この場合「僕」は話し手本人をそれと指すのではなく，話し手の内面的な特徴，例えば「不屈な精神」などを暗に意味していると見るべきであろう．) このような文は談話の流れを推し進めるものではない．聞き手はこの文によって何ら新しい情報を得ていないのである．しかしこの種の文が現に存在するということはやはり何らかの存在価値があるということである．その存在価値とは，話し手と聞き手の共有する知識を再確認し，念を押すことである．例文17も同様に解釈出来る．(ここでも「女房」という語は「女房の置かれた立場」「越えてはならない限界」といったものを指していると見られる．) こういった文は，また前の文を受けてそれをいったん肯定したうえで別の見方を提示する場合にも使われる．談話の流れを一時止めて新しい方向を与える役割を果たしていると言える．

このようなわけで旧情報を繰り返す，X ハ X ダという型の文も存在し得るのである．この型の文は新情報を含まないのであるから，焦点に欠ける文ということが言えよう．その意味で「焦点不在型」の文と命名した次第である．

1-2-5. いわゆるウナギ文について

奥津(1978)以来よく言われるウナギ文とは，「僕はうなぎだ」の如く X ハ Y ダの構造を持ちながら Y が X の属性を表わすのでもなく，また X で表わされる内容を Y と指定するとも解釈出来ない文を指す．ウナギ文と言われる文は現在日常使われている日本語にも多いし，古典語にもその例は見出せる．

例 18　春は曙

例 19　春は曙が良い，趣がある

有名な『枕草子』第一段の例文 18「春は曙」もその一例である．古文の解説書には，しばしばこれは例文 19「春は曙が良い，趣がある」等の略である，と書かれている．確かに例文 18 からは例文 19 のような意味が読み取れるが，この述部「曙」はそのような内容を含みつつ，その内容全体を「曙」一語に凝縮したものと取ることが出来る「事象名詞」なのである．従ってこの文の述部は一語で現象全体を表現する「雨！」というような現象文の一語文に似ていると言えよう[7]．奥津(1978)はダが述部を代用していると主張するが，それではダを欠く例文 18 のような文の説明がつかなくなる．これはやはり名詞がある特定な文脈で動詞を内包して現象全体を写し取ることが出来，ダはこの「事象名詞」に完全文としての資格を与え，同時に断定のモダリティを文に与える働きを持つものと考えるのが最も自然なのではないだろうか．例文 18 における述部「曙」は主題「春」に対する解説部を成し，新情報を与える部分であるので，この語が文の焦点である．これは広域焦点型の文と言えるが，この場合新情報は表現された語の他に非言語的コンテクストによって補われなければならない．広域焦点型の文の中でもかなり特殊な類に属する．同類の文に次のようなものがある．

例 20　今夜は雪だわ．(川端康成『雪国』)

例 21　「先生は」「先生は学校」(夏目漱石『三四郎』)

例 22　お父さんとお母さんは恋愛ですか．(瀬戸内晴美『生きるということ』)

これらの文において X の部分は文の主題を表わしている．主題になり得る要素は一般に聞き手にも既知の情報であるから例文 21 のような文脈では省くことが出来るし，また実際に省かれることが多い．しかし次のような文においてはどうであろうか．

例 23　私はコーヒーです．

このような文は例えば二人以上の人が喫茶店に入って注文の物を選択した時に発する発話である．この場合「私は」は同席の他の人と「私」を区別しているのであり，単に主題を表わしているのではない．従ってこれを省略することは出来ない．この文では「私」も「コーヒー」同様新しい重要な情報を表わしている．これは久野(1973)の言う「対照を表わすハ」と取るべきであろ

[7] 但し，これらの文は断定を形として表わす要素(ナリ，ダ)を欠くため，統語論レベルでは「文相当名詞」と解釈されなければならない．

う[8]．その証拠に例文23は一人だけで喫茶店に入った時の発話としては甚だ不適当である[9]．この種の文は X が対照的新情報を，そして Y が付加的新情報を表わし，X, Y 共に文の焦点と解せるので「二点焦点型」と呼ぶことが出来よう．

先の例文18「春は曙」も実は主題の「春は」に対照の解釈を与えることも可能である．この冒頭の文からだけではどちらとも決め兼ねるが先を読み進むと「夏は夜」「秋は夕暮」「冬はつとめて」と続くので，この文脈では「春は」を「対照的新情報」と解釈する方が自然だと言うことが出来る．このような例は他にも見られる．

例 24 「きみはいったいどこの産だ」「おれは江戸っ子だ」(. . .)「きみはどこだ」「僕は会津だ」(夏目漱石『坊っちゃん』)

いわゆるウナギ文はこのように「主題—解説」即ち「旧情報—新情報」の形を取って略題可能なものと，「対照的新情報＋付加的新情報」という構成の二種の新情報から成り，X ハの存在が話し手の意図の正確な理解のために不可欠なものとの二種類を認めることが出来るのである．前者は「(変型) 広域焦点型」の文であり，後者は X も Y も焦点である「二点焦点型」の文である．

1-3. まとめ

本節では名詞述語文を談話文法の観点から検討し直し，新しい分類を行った．以下の五類型である．1) 文全体が焦点(領域)を成す「文焦点型」(Y ダ)，2) 旧情報 (X) に新情報 (Y) を加え，焦点(領域)が Y 全体に及ぶと見られる「広域焦点型」(X ハ Y ダ)，3) 新情報 (Y) が旧情報 (X) に先行し，文中の一要素 (Y) のみに焦点が当たっている「一点焦点型」(Y ガ X ダ)，4) 前半 (Y_1) が対照的新情報，後半 (Y_2) が付加的新情報を表わし，Y_1 も Y_2 も焦点となる「二点焦点型」(Y_1 ハ Y_2 ダ)．そして 5) 旧情報を主題部と述部で繰り返す「焦点不在型」(X ハ X ダ) である．

次章では多様な用法を持つノダ文をこの分類を使って検討してみたい．

---

[8] 発話の場にいる話し手，聞き手は対話者という集団を構成し，その存在自体がコミュニケーションが成立する前提とされている．従ってこのどちらかが主題となる場合，多くは状況陰題として言語的には表面に現われることがない．故に顕題の形を取る時はそこに話し手の特殊な意図が窺われるのである．ハの本質的な機能は「取り立て」であり，特定の集団の中から一つの要素を取り立てれば必然的に残った要素との間に対比の意味合いが生まれる．従って対話者という集団の構成要素を取り立てた「私は」「あなたは」という形は提題の他に多くの場合対比の機能をも担うことになるのだと考えられよう．

[9] この場合はただ「コーヒーです」と言うのも不適当で「コーヒー」と名詞を裸のまま差し出すか「下さい」「お願いします」など依頼を表わす述語を加えなければならない．このことから「名詞＋ダ」の文は叙述断定文にしか使われないことが分かる．

2. ノダ文の談話論的解釈

「どこへ行くのですか」などの文に現われるノダの意味と用法については，既に多くの言語学者の優れた研究がある[10]．諸説が主として意味論的見地から出されているが，次の点に関しては様々の学説の中でもほぼ言語学者間の意見の一致を見ているようである．

一形態論的にはノダは一つの形態素と見なされ，体言化の働きを持つ機能語ノと断定の法助辞(助動詞)ダに分析することが出来る．

一統語論的にはノダ文は X ハ Y ノダという構造を持ち，X が先行文脈を表わしている．

一意味論的にはノダ文は言語的または非言語的先行文脈に説明を与える．

即ちノは純粋に形態論的立場から言えば名詞(形式名詞)であるから，先行の形容詞文または動詞文は連体修飾成分と見なされ，それにダを加えることによって文全体は名詞述語文と見なされ得るのである．このノダ文について永野賢(1951)は次のような意味を認めている．

一根拠のある説明，理由の提出，回想，二重判断，強調．

他の諸説もこの域を出ないようである．しかしノダ文がこのように様々な意味を表わし得るということについてこれまで統一的な説明がなされたことはない．筆者はこのノダ文の意味が，先に見たいくつかのタイプの名詞述語文の枠組の中で捉えられるのではないかと考えた．以下にノダ文の構造を名詞述語文の構造と並行して考えてみたい．

2-1. ノダ文 vs 非ノダ文

ノダ文の構造を考えるにはまず非ノダ文と比較してみることが必要かつ有用である．

例 25-a　子供が外で遊んでいる．

例 25-b　子供は外で遊んでいる．

例 25-c　子供が外で遊んでいるのだ．

例 25-d　子供は外で遊んでいるのだ．

例文 25-a は，ある事象を丸ごと把握し提出している現象文であり，無題文である．25-b は，同じ事象を判断の対象とし，その中から「子供」を引き分けてそれについて述べるという形を取っている判断文である．どちらも特別な文脈無しに現われ得る文であり，伝えたい情報が全て文中にあるのでそれだけで充足している文と言える．それに対して 25-c, 25-d は，先行文脈を旧情報とし，それに新情報を説明として付け加えるという形を取っており，単独で現われることはな

[10] 三上(1953)，久野(1973)，山口(1975)，池上(1981)，北原(1981)，寺村(1984)，田野村(1990)など参照．

い．その意味でノダ文を分節文と見なした三尾砂(1948)の解釈は当を得たものと言えよう．ノダ文を正しく理解するには文レベルの主題の他に談話レベルの主題という概念をも導入して，文の二段階(文レベル，談話レベル)分析を行わなければならない．この点を考慮して上の四つの文を見直すと，25-a, 25-b の非ノダ文は談話レベルの主題を欠く無題文であり，文全体が焦点(の領域)となっている「文焦点型」の文と解釈できる．25-c, 25-d のノダ文は談話レベルでは有題文と見ることが出来る．25-c は，二つの解釈が可能である：その一つは先行文脈が「あの嬉しそうな声」「うるさい音」などであり，その説明が「子供が外で遊んでいること」であるという解釈である．この場合この文は状況を陰題として持つ有題文であり，「広域焦点型」の一種と考えられる．二番目の解釈によると「誰かが外で遊んでいる」という状況は話し手にも聞き手にも分かっており，これを前提としてこの命題中の変項「誰か」を具体的に「子供」と指定して命題を完成させていることになる．これは「外で遊んでいるのは子供だ」と語順を入れ換えて顕題にすることが出来るので，転位陰題の文と解釈出来る．この解釈によればこの文は「一点焦点型」の文である．最後に 25-d の文は「子供は」が文主題として「外で遊んでいる」にかかり，更に文全体が例えば「子供の不在」という談話レベルの主題に対する解説となっている．従ってこの文もまた談話レベルでは状況陰題の文であり，「広域焦点型」の一種である．

以上をまとめると次のようになる．

		文レベル	談話レベル	文型
25-a	(Y)	無題	無題	文焦点型
25-b	(X ハ)—(Y′)	顕題	無題	文焦点型
25-c	(Z ハ) [(Y) ノ] ダ	無題	有題(状況陰題)	広域焦点型
	(X—Pc)—(Y′) [ノ] ダ	無題	有題(転位陰題)	一点焦点型
25-d	(Z ハ) [(X ハ)—(Y′) ノ] ダ	顕題	有題(状況陰題)	広域焦点型

但し，Y：一事象を表わす文，X：Y の一成分，Z：先行文脈，Y′＝Y－X

Pc：格助詞

以下，順を追ってノダ文が表わすとされる様々な意味に構文的な説明を与えてみることにしよう．

2-2. ノダ文の文類型

2-2-1. 「広域焦点型」のノダ文

「広域焦点型」の文とは旧情報を主題としてそれに新情報を付け加え，述部全体が焦点(領域)となる文であった．これに当たるノダ文は次のような文である．

例 26 その後私はあなたに電報を打ちました．ありていに言えばあの時私はちょっとあなたに会いたかったのです．(夏目漱石『こころ』)

例 27 涙がぽろぽろカバンに流れた．(...)「何かご不幸でもおありになったのですか」「いいえ，今人に別れて来たんです」(川端康成『伊豆の踊子』)

例文 26 においては，第一文の内容が第二文(ノダ文)に対する旧情報となり，談話レベルではそれが隠れた主題となって第二文の内容がそれに対する説明を与えている．例文 27 のノダ文二つは「涙がカバンに流れた」という状況を陰題として，やはり説明を与える文である．この種のノダが「説明のノダ」と言われるものである．これらの文は談話レベルで X ハ Y ダの構造を持つ名詞述語文と同質の文と考えられる．即ち主題は話し手，聞き手両者に共通の知識を指し，ノダ文がそれに対する解説部として主題を理解するための一つの解釈を与えると考えられるのである．談話主題は多くの場合状況陰題となるが，これは「旧情報は前後の文脈あるいはその場の状況などによって理解可能である限り省略される」という言語の節約の原則に基づいているものと考えられる．省略された部分はその省略という行為自体によって旧情報を伝え，かつ談話にまとまりを与えているのである．但し稀にではあるが，談話主題が顕題になることもある．

例 28 なるほど，階下で練習曲の音がしているのは，雪子が先に身支度をしてしまったところで悦子に捆まって，稽古を見てやっているのであろう．(谷崎潤一郎『細雪』)

ノダ文は旧情報を受けて伝達の中心となる新情報を聞き手に提供する．ノダが説明，理由，原因，判断の根拠，言い換え，まとめ，...などの意を表わすという指摘はよく為されるが，これらは全て個々の状況に応じて変わる意味論的な値であり，統語論的にはこの種のノダ文は従来言われて来た通り X ハ Y ダで表わされる名詞述語文の述部に相当するという解釈で十分であろうと思われる．ただここで一つ注意しなければならない点は日本語の名詞述語文において述部が西洋文法の属詞に相当する場合はむしろ少なく，X (主題) と Y とは等値関係よりは近接関係で結び付けられているということである．そこにこそウナギ文を可能にする下地があるのである．ノダ文も先行文脈に非常に漠然とした関係で結び付いていることが少なくない．このような場合意味論的な値を一つ定めようとすると困難を感ずることになるのである．例えば次のような文がそれである．

例 29 あの...実は今度の滞在中に是非あなたにお骨折願い度いことがございますのです．(円地文子「女坂」)

この場合ノダは，ある一つの言語化された事実 Y が聞き手も知っているはずの事実あるいは状況 X に結び付いているということを聞き手に汲み取ってもらいたい旨の話し手の意志の現われとでも解釈すれば良いのではないだろうか.

2-2-2. 「一点焦点型」のノダ文

1-2-3. で強調構文 X ノハ Y ダが「一点焦点型」のノダ文と密接な関係にあることを述べた. これを本節で少し詳しく掘り下げてみよう.

三上(1953)によれば指定文 X ハ Y ダは,「語順を変えて指定以前のセンテンスに戻すことが出来る」文である. この指定文の原型と考えられるのが Y—Pc X ダ型の本稿で「一点焦点型」と呼んだ文である. ここで X の部分に機能語ノによって名詞化された節が来ると Y—Pc X ノダが得られるのである. 主題は X ノの部分に隠れているが, これを顕題化したものが X ノハ Y ダの強調構文である. 例えば次の例を見てみよう.

例 30-a　自分は杉子の魂を愛する.

例 30-b　自分の愛するのは杉子の魂だ. (武者小路実篤『友情』)

例 30-c　自分は杉子の魂を愛するのだ.

上記の三つの例文は 30-a によって表わされた命題を共有する. この命題のうちの目的語「杉子の魂」を強調したものが 30-b, 30-c である. 従って両者とも「杉子の魂」を焦点として持つ文と言える. 但し, 30-b では一つの文の前提と焦点がはっきり分裂して現われているが, 30-c では焦点が前提の間に割り込む形で現われ, 文脈の助けがなければ焦点を見分けることは困難である. 後者の方が強調構文としては無標のタイプであり, (擬似)分裂文の形を取っている前者の方が有標的であると言える.

では, 30-c はなぜ目的語を焦点とする解釈が可能なのであろうか. この文を 30-a と比べると, 談話レベルでは 30-a は無題文であり,「文焦点型」の文と言える. 文全体が焦点領域であり, その一番最後に位置する動詞「愛する」が「情報価値の高い要素ほど文の後方に置く」という談話規則によって焦点の解釈を受ける. この 30-a の動詞にノダを付けたものが 30-c である. 動詞は本来叙述内容といわゆる「陳述」を同時に表わす語であるが, ノダを付け加えることによって断定の陳述はノダのダが担うことになり, 動詞は叙述内容のみを表わすことになるので重要度はそれだけ低くなる. その結果, 動詞の直前の要素が一番重要な情報を表わし, 焦点解釈を受けることが可能になると考えられるのである. 福地(1985)によれば「焦点の右にある要素は焦点の領域外にある」のであるから, 目的語「杉子の魂」がこの文の焦点であれば, その右に位置する動詞は焦点領域から外され, 旧情報を表わすことになるのであろう. こうして「文焦点型」の

30-a の文がノダの付加によって 30-c の「一点焦点型」の文になってしまうのである.

ノダ文が「広域焦点型」か,「一点焦点型」かは主に文脈によって(即ち何が旧情報かによって)定まるが,疑問詞を含む文は疑問詞が焦点となる「一点焦点型」の文であることが多い.疑問詞疑問文にノダ文が多いのはその為である.

以下に「一点焦点型」のノダ文の例をあげる.

例 31 信用しないって,特にあなたを信用しないんじゃない.人間全体を信用しないんです.(夏目漱石『こころ』)

例 32 「僕が馬券を買ったんじゃありません」「あら,誰が買ったの」「佐々木が買ったのです」(夏目漱石『三四郎』)

例 33 赤シャツはホホホホと笑った.(...)赤シャツがホホホホと笑ったのはおれの単純なのを笑ったのだ.(夏目漱石『坊っちゃん』)

(下線部が焦点,点線部は前提=談話主題)

「一点焦点型」のノダ文はこのように前提も焦点も文中に含む文であり,その点で前提が省略されるのが普通の「広域焦点型」のノダ文とは大きく異なるのである.また談話主題は普通陰題の形をとるが,例文 33 のように表面に現われて文主題と重なり,一文中に主題が重複する (redundancy) 場合も数は少ないが,存在する.

2-2-3. 「焦点不在型」のノダ文

先に名詞述語文の中に X ハ X ダ型の,何ら新情報を提供せず,確認或いは念押しの意図で発せられる文があるのを見た.ノダ文にも同様の文類型が認められる.すなわち主題部の X は話し手が観察する状況を指し,それを状況陰題として述部でその状況を話し手の解釈を一切加えずに言語化するという文である.例えば以下のような文である.

例 34 私は黙って茶を飲んだ.飲んでしまっても黙っていた.「あなた,たいへん黙り込んじまったのね」と奥さんが言った.(夏目漱石『こころ』)

例 35 おれはなんとも言わずに山嵐の机の上にあった一銭五厘をとっておれのがま口の中へ入れた.山嵐は君それを引き込めるのか,と不審そうに聞くから(...)(夏目漱石『坊っちゃん』)

この種の文は聞き手にある事実が確かに存在することを確認するための発話であることが多く,ノダはしばしば終助詞カやネを伴ってノ(デス)カ,ノ(デス)ネとなる.しかし聞き手を特に意識

しないで発する次のような文もある.

例 36　私は太鼓を提げてみた.「おや，重いんだな」(川端康成『伊豆の踊子』)

田野村(1990)はこの種の文も X ハ Y ノダ(田野村は α ハ β ノダとする)の構造を基底に持つ文と考え，X (α) は個別の事実(例えば「この太鼓は重いこと」)を指し，Y (β) が一般的な真理(例えば「太鼓は重いという，太鼓の属性」)を表わすと主張する．しかしこのような説明は我々の言語感覚とは相当かけ離れていると言わざるを得ない．田野村自身「β が α と等価であるかのように見える場合もある」と述べているが，この場合は実際に等価なのである．これを無理に異なった値を α と β に当てはめようとするのは田野村がノダ文の基本構文を α ハ β ノダ一つと考えているからだと思われる．X ハ X ノダという構造もノダ文の基本構造の一つであると仮定し，主題と述部が同一の事実を指し示すことがあり得るということを認めれば，この不自然さは解消されるのではないだろうか.

2-3.　ノダ文のまとめ

1. では名詞述語文を一文中の焦点の現われ方によって 1) 文焦点型，2) 広域焦点型，3) 一点焦点型，4) 二点焦点型，5) 焦点不在型の五種類の型に分類した．このうち 1) の文焦点型と 4) の二点焦点型は新情報のみから成る文である．ノダ文は常に旧情報を前提とし，それを談話主題とする，談話レベルにおいては有題文であるので，この二つの型はノダ文には存在しない．よってノダ文は 2), 3), 5) の型に分類されることになる.

ノダには確かに色々な意味が認められるが，このように談話レベルでその構文を検討してみるといくつかの類型にまとめられ，その構文的な特徴が意味に反映しているのだと考えることが出来る．ノダ文も決して特殊なタイプの文ではなく，名詞述語文の枠組の中である程度までは捉えることが可能なのである.

おわりに

本稿では名詞述語文を中心に，統語論的(主語，述語等)，あるいは意味論的(措定文，指定文)分析を越えて，談話レベルからの分析を試みてみた．即ち，新情報と旧情報，前提と焦点という談話レベルにおける情報を用いて，新しい文の分析を行ったのである.

この分類の利点は文を孤立した存在としてではなく，前後の文脈や場面と関連づけて捉えることが出来る点にある．従って文脈依存性の高いウナギ文にも談話の流れの中で的確かつ自然な解釈を与えることが出来る．また，従来 X ハ Y ノダがその基本構造であるとされてきたノダ文に

も様々な文型が存在し，その多様な意味・用法も文構造の違いとして捉えられることを証明した．

本稿ではこの分類を名詞述語文にのみ適用したが，これはもともと文の分類として有効であり，動詞述語文や形容詞述語文にも勿論適用可能である．これを使えば，省略や否定文・疑問文の焦点と焦点領域(スコープ)などの問題で，統語論や意味論的見地からだけでは説明が難しかった問題にも別の角度から光を当て，解決の糸口を探ることが出来るのである．

本稿は文の構造と意味の間の関係を明らかにし，統語論と意味論の橋渡しをすることを目的として書かれたものである．従来の統語論レベル，あるいは意味論レベルでの文法研究が平面的な研究とすれば，談話レベルでの研究は立体的な研究と言えるのではないだろうか．テクスト全体を視野に入れ，その中に個々の文を位置づけるという姿勢は，主題，指示詞，視点の問題など様々な興味深い問題に文レベルを越えて統一的な説明を与えるのに大いに役立つものと信ずる．本稿がその方向への一つのきっかけとなれば幸いである．

参 考 文 献

井上和子 (1989) 「「は」と「が」：統語構造と談話構造」，井上和子編『日本文法小事典』，大修館書店．

池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学——言語と文化のタイポロジーへの試論』，大修館書店．

——— (1983) 「テクストとテクストの構造」，『談話の研究と教育 I』，国立国語研究所，大蔵省印刷局．

——— (1989) 「日本語のテクストとコミュニケーション」，井上和子編『日本文法小事典』，大修館書店．

内田賢徳 (1989) 「主語をめぐる助詞の用法区分について」，久野暲・柴谷方良編『日本語学の新展開』，くろしお出版．

大野 晋 (1978) 『日本語の文法を考える』，岩波新書．

奥田靖雄 (1990) 「説明(その1)——のだ，のである，のです」，『ことばの科学4』，むぎ書房．

奥津敬一郎 (1966) 「「ダ」による述部代用化——展成文法への試み」，『日本語教育』6号，3月[『論集 日本語研究7：助動詞』，(有精堂，1979)所収]．

——— (1978) 『「ボクハウナギダ」の文法』，くろしお出版．

——— (1989) 「うなぎ文と「だ」の文法」，井上和子編『日本文法小事典』，大修館書店．

川端善明 (1976) 「用言」，『岩波講座 日本語6：文法 I』，岩波書店．

北原保雄 (1981) 『日本語の文法』，中央公論社．

金水 敏 (1986) 「名詞の指示について」，『築島裕博士還暦記念国語学論集』，同記念会編，明治書院．

久野 暲 (1973) 『日本文法研究』，大修館書店．

——— (1978) 『談話の文法』，大修館書店．

小金丸恭美 (1990) 「作文における『のだ』の誤用分析」，『日本語教育』71号，日本語教育学会．

——— (1990) 「ムードの「のだ」とスコープの「のだ」」，『日本語学』Vol. 9，3月号．

阪田雪子，倉持保男 (1980) 『教師用日本語教育ハンドブック ④：文法 II——助動詞を中心にして』，国際交流基金，凡人社．

坂原 茂 (1989) 「メンタル・スペース理論概説」，仁田義雄・益岡隆志編『日本のモダリティ』，くろしお出版．

——— (1990) 「役割，ガ・ハ，ウナギ文」，『認知科学の発展 Vol. 3』，日本認知科学会編，講談社．

佐久間鼎 (1940) 『現代日本語の研究』, (復刻 1983, くろしお出版).
——— (1941) 『日本語の特質』, 育英書院.
柴谷方良 (1990) 「助詞の意味と機能について——「は」と「が」を中心に」, 『文法と意味の間——国広哲弥教授還暦退官記念論文集』, 同編集委員会編, くろしお出版.
田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I——「のだ」の意味と用法』, 和泉書院.
寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味：第二巻』, くろしお出版.
——— (1986) 「「前提」「含意」と「影」」, 宮地裕編『論集 日本語研究(一)現代語編』, 明治書院.
——— (1991) 『日本語のシンタクスと意味：第三巻』, くろしお出版.
永野 賢 (1951) 『現代語の助詞, 助動詞——用法と実例』, 国立国語研究所, 秀英出版.
——— (1986) 『文章論総説』, 朝倉書店.
西山佑司 (1990) 「コピュラ文における名詞句の解釈をめぐって」, 『文法と意味の間——国広哲弥教授還暦退官記念論文集』, 同編集委員会編, くろしお出版.
仁田義雄 (1989) 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」, 仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』, くろしお出版.
——— (1991) 『日本語のモダリティと人称』, ひつじ書房.
福地 肇 (1985) 『談話の構造』, 新英文法選書：第10巻, 大修館書店.
益岡隆志 (1987) 『命題の文法——日本語文法序説』, くろしお出版.
——— (1989) 「モダリティの構造の疑問, 否定のスコープ」, 仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』, くろしお出版.
——— (1991) 『モダリティの文法』, くろしお出版.
三尾 砂 (1948) 『国語法文章論』, 三省堂.
三上 章 (1953) 『現代語法序説——シンタクスの試み』, 刀江書院[復刻 1972, くろしお出版].
水谷信子 (1985) 『日英比較 話しことばの文法』, くろしお出版.
山口佳也 (1975) 「「のだ」文について」, 『国文学研究』〈早稲田大学国文学会〉56号, [『論集 日本語研究 7：助動詞』(1979, 有精堂)所収].
山田孝雄 (1908) 『日本文法論』, 宝文館.

Lucas, Nadine. 1991. The suffix verb DE ARU in scientific and technical literature. *European Studies in Japanese Linguistics 1988-1990*. London: Lone Publications.
———. 1991. Syntaxe discursive du japonais scientifique: A propos du thème. *Anais do II encoutro nacional de professores universitários de língua, literatura e cultura japonesa*. 77-98. São Paulo, Centro de Estudos Japoneses da Universidade de São Paulo.
———. 1991. L'évolution de la syntaxe en japonais contemporain — Le suffixe *de aru* (c'est). *Estudos japoneses* 11: 93-107. São Paulo, Université de São Paulo.
Ujiié, Yōko. 1986. Utilisation of a given form in natural language—Developed use of the function of Japanese particle 'NO'—. *Travaux de linguistique japonaise*, Vol. VIII: 143-150. Paris, Université de Paris 7.
———. 1987. Japanese people's mental processes reflected in the 'WA' sentence. *Bulletin of Yamagata University* 11, N° 2: 385-95.
Villard, Masako. 1986. Quelques aspects de l'interprétation sémantique du prédicat nominal en japonais (Multiples possibilités d'interprétation, *wa* et *da*). *Travaux de linguistique japonaise* 8: 25-35. Paris, Université de Paris 7.